Ⅲ　成果と課題

昨年度末の英語アンケートでは,「英語の学習が楽しい」と答える児童の割合が５ポイント低下した。英語は，まず楽しまなければ，５領域のどの技能も伸ばすことが困難であるとの考えから，「英語の学習が楽しい」と答える児童を育てることを肝要として研究を進めてきた。「英語が楽しい」と感じられない理由として,「分からないから」「難しいから」が挙げられるのではないか。難しくても，はっきりとした必然性のある目的があって英語を使う場合，児童は楽しみながら多くのことを吸収していく。しかし，指導者に力が入りすぎて多くのことを教え込もうとしたり，児童の願いや目的とかけ離れた活動を繰り返したりするとき，児童の気持ちは英語から離れていくように見える。

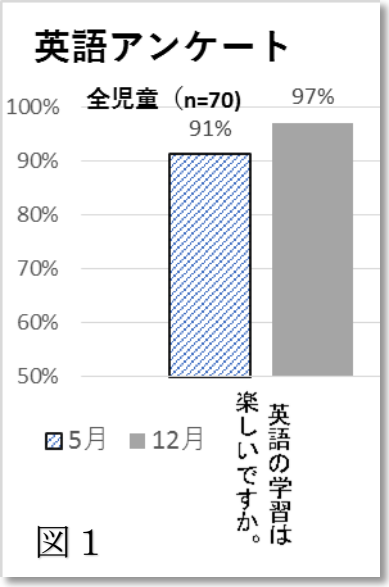


図１

そこで，今年度の研究では，これまで通り，児童にとって必然性があり楽しいと思えるような言語活動の工夫を一つ目の視点とした。その場合，児童の実態をよく見極め，言語の習得段階ではスモールステップを踏むことを大切にして,「難しい」「分からない」を生まないように心掛けた。また，二つ目の視点として，評価を適切に行うことで，指導と評価の一体化を図り，指導者の授業改善と児童の学習改善が同時に図れる授業を目指した。三つ目としては，これまで本校で作り上げてきた新本オリジナルの単元構成を基にした，学びの広がりと人との関わりの広がりが生まれる単元構成の工夫を視点として取り組んだ。

その結果，今年度末の英語アンケートでは，９７％の児童が「英語の学習は楽しい」と答える結果が得られた。以下は，三つの仮説に基づいて研究の成果をまとめ，全体を通して残された課題についてまとめた。

１　研究の成果

（１）仮説1について

> 1　単元や発達段階の特性を踏まえて言語活動を工夫することにより，児童は，自分の思いや考えをもち，それを伝え合うための知識・技能を身に付けるであろう。

昨年度までの実践で成果が得られた，楽しいから繰り返してやってみたくなる，自分の思いを伝えられるからいろいろな人と活動したくなる言語活動を取り入れることで,児童は目標としている言語材料を習得し，その知識・技能を活用する姿が見られた。

第１・２学年の実践では，秋の果物を扱った。自分の思いを表現できる歌やチャンツで，友達と繰り返し英語表現を楽しむことで，“Do you like～？” “Yes , I do. No , I don’t.”の表現を全員が身に付けることができた。また,「こんな果物についても，好きか嫌いか聞いてみたいな。」という相手意識の高まりから，fig（イチジク）や pomegranate（ザクロ）といった果物も英語で言える姿が見られた。

中学年では,「アルファベットさがし大会」という言語活動の中で，クイズ作りや問題の出し合いに熱中する児童の姿が認められた。思いのつまったクイズを出し，それに答えてもらうことで，児童らは定型文だけではなく，もっとクイズ大会を盛り上げる英語表現を探し，使おうとすることができた。

高学年では,「書くこと」の言語活動に抵抗感をなくす工夫を実践し，効果を挙げた。６年生では，スペイン日本人学校へ，日本や岡山のよさを届けようという思いをもち，辞書で調べながら伝えたい英語表現を書き写したり，より読みやすくきれいなアルファベットを書こうとして黙々と鉛筆を動かしたりする児童の姿が見られた。

図２

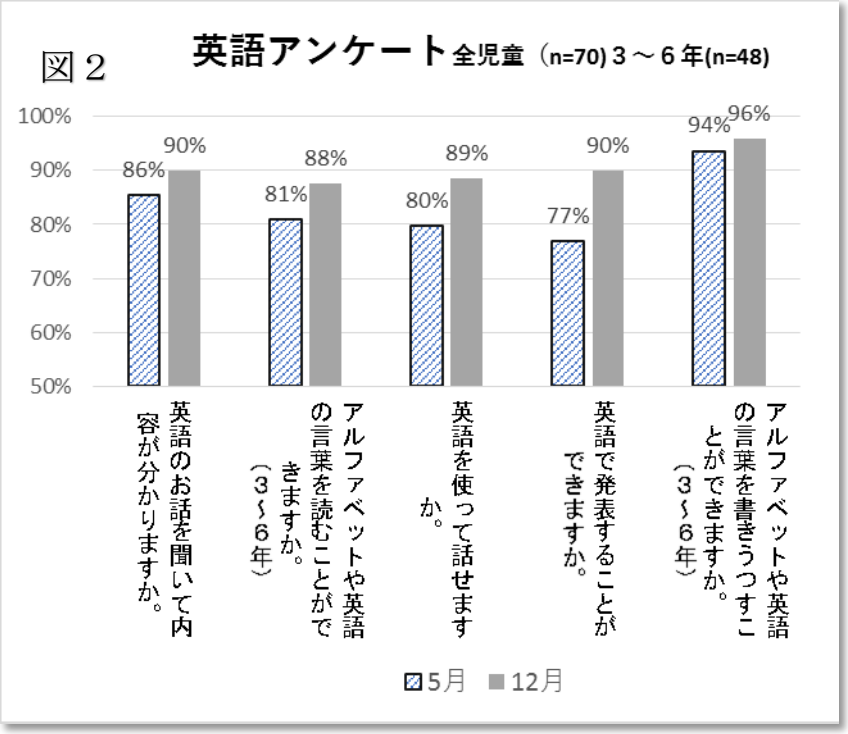
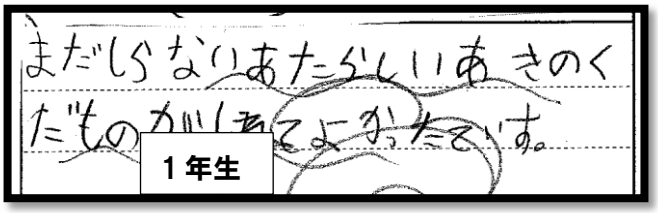
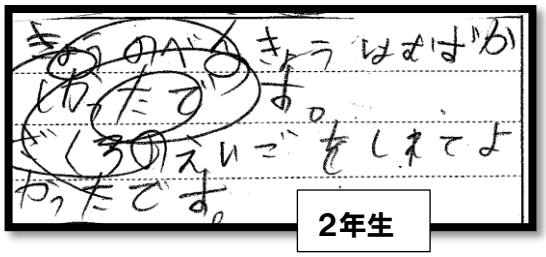
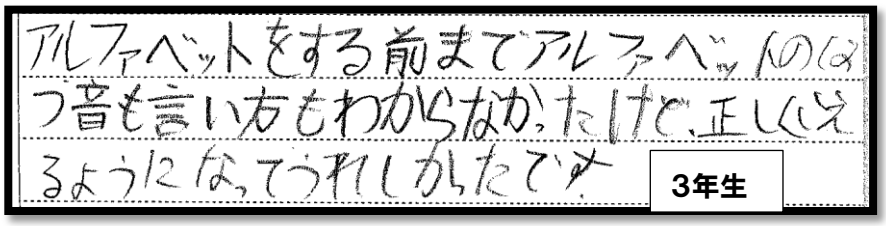


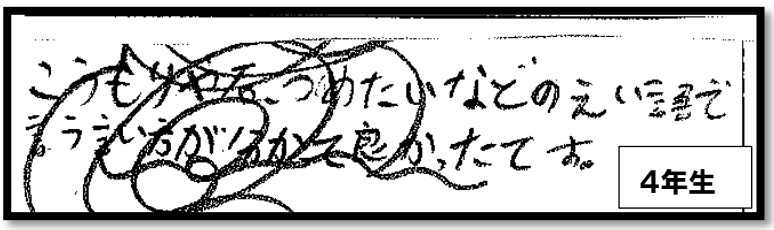
図２からは，「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」の知識・技能に関する児童の自信が，いずれも向上していることが推察される。

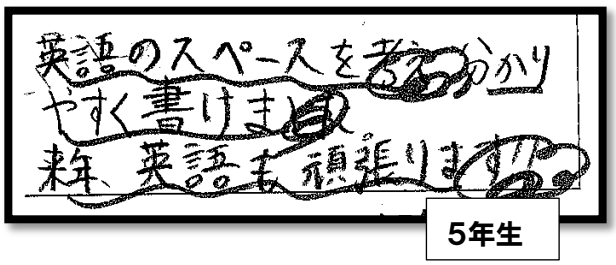
表１　児童の振り返りから

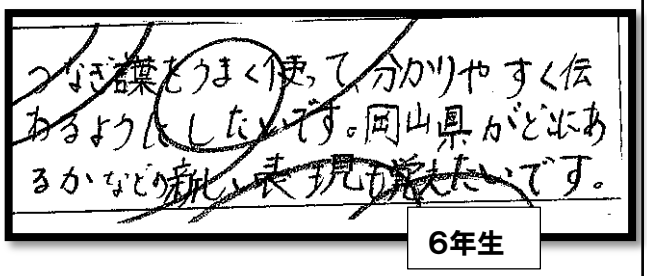












2　１単位時間または単元の中で，児童自身による評価（振り返り）や教師による評価を適切に行うことによって，児童は思考力・判断力・表現力を高めながら学習に取り組むであろう。

まずは単元の評価規準を作成することから取り掛かった。そのことで２つの成果があったと思われる。１つ目は，この評価規準を全ての児童に達成させるためには，どのような支援が必要になるかを考えることで，授業作り・授業改善の視点が明確になったことである。２つ目は，指導者にとって，５領域×３観点全てを１単位時間で評価することは困難なことから，１年間または２年間を見通した評価の視点と評価を精選する目を養うことができたことである。

このことに加え，研究授業後の協議おいて，福原先生から「指導と評価の一体化」についてご教示いただいた。これをもとに，作成した評価規準を指導との一体化につなげる具体として，評価規準に照らして十分でない状況が見られた場合に，その後どのような指導改善を行い，その結果どう児童が変容したかを蓄積することを実践に加えた。（各実践記録参照）

また，児童自身が身に付けたい英語の力を自覚し，自己調整しながら学びを深めることができるようにするため，振り返りカードに，単元の目標を「がんばるリスト」として分かりやすく表記した。児童は，単元のスタート時から自分のゴールの姿をイメージすることができ，毎時間今の自分の力はどうか，次の時間はどんなことをがんばりたいか，を振り返ることができた。この姿は特に高学年で顕著に見られた。「書くこと」がゴールになっている単元では，自主学習でアルファベットの文字練習をする姿，「話すこと[発表]」単元では，ALT に自分から発音チェックを求める姿などが目立った。また，小中連携担当から，今の学習が中学校でどのように扱われるかという学びのつながりが意識できる評価を受けることで，より学習意欲を高める場面も見られた。

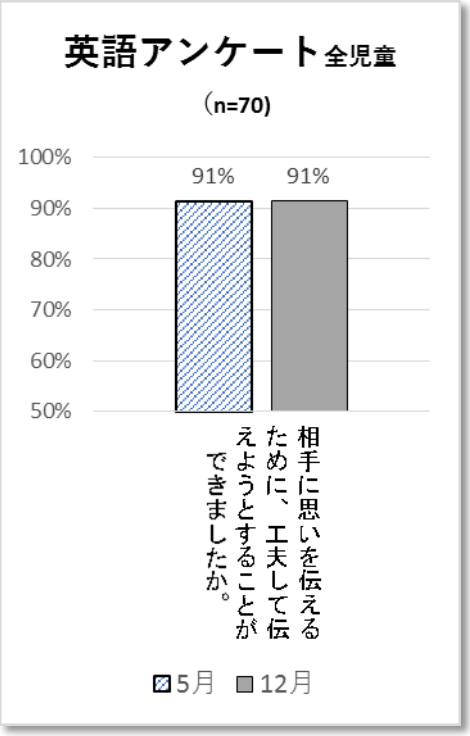
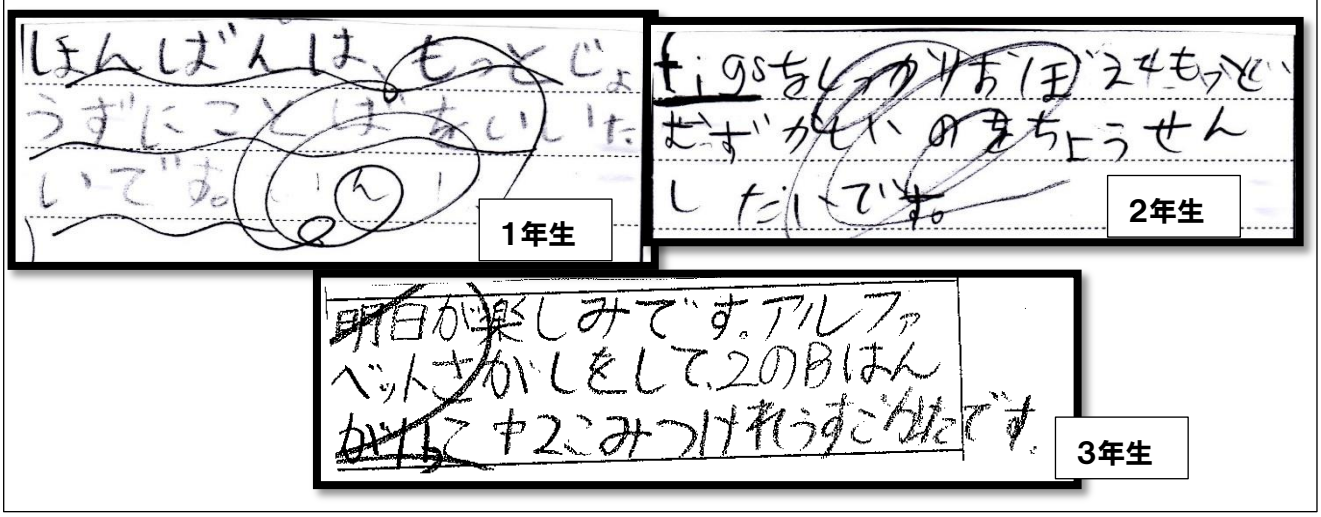
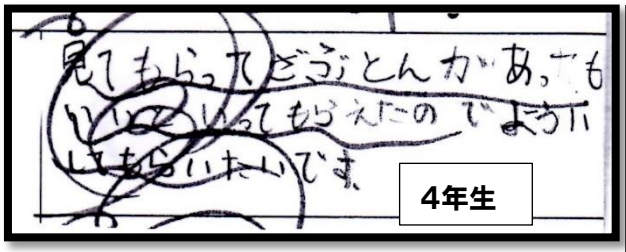
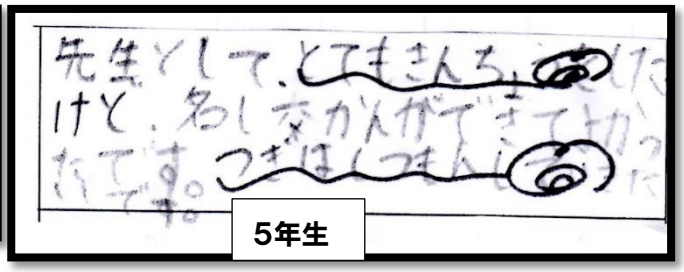


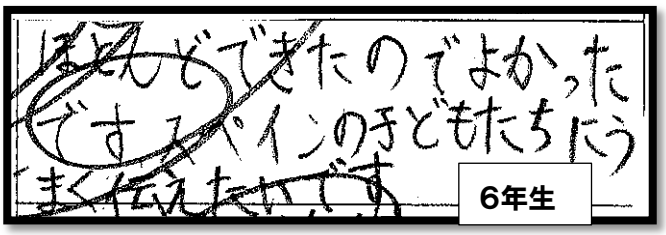
図３からは，多くの児童が相手に思いを伝えるために，工夫して英語で伝えようとしていたことが分かる。覚えたことを話すだけではなく，必然性がある場面状況の中で主体性を重視した言語活動を通して身に付けることができる力（思考力・判断力・表現力）であると考える。仮説１と３と大きく関わりながら果たせた成果であると言える。

表２　児童の振り返りから









③　学びのつながりを意識して，様々な人々と関わることができる単元（新本オリジナル）を構成することで，英語によるコミュニケーションの楽しさを味わい，より広い世界に目を向けるであろう。

コロナ禍での実践だったため，様々な人々と関わる単元構成はできなかったが，各学年とも工夫と対策を凝らして実践を行った。

第１・２学年では，クラスのお友達や先生との関わりから異学年，幼稚園児へと関わりの対象を広げ，いろいろな人といろいろな立場で，英語で会話をする楽しさを味わうことができた。ここでは，日頃のピア・サポート活動や生活科での体験活動との関連が意欲付けに効果的であったといえる。

第４学年では，総社市に住む外国人の方に総社の名所を紹介することをゴールとする単元構成を設定した。児童は，英語で伝えなければいけない必然性を強く感じながら，主体的に学習に取り組むことができた。校外学習と関連付けたことで，児童は紹介したい内容をより具体的にイメージし，言葉だけでなく実物や動作など非言語でのコミュニケーションツールも駆使しながら伝えようとしていた。実際の紹介活動では，外国人の方に英語が伝わる喜びを感じながら，やり取りを楽しむ児童の姿が認められた。

図４からは，「書くこと」の領域で主体的に学習に取り組む態度が向上したことが伺える。これは，書くことに必然性をもたせる単元構成の工夫や，第３学年からスモールステップでアルファベットに慣れ親しむ活動を積み重ねてきたことによるものと思われる。

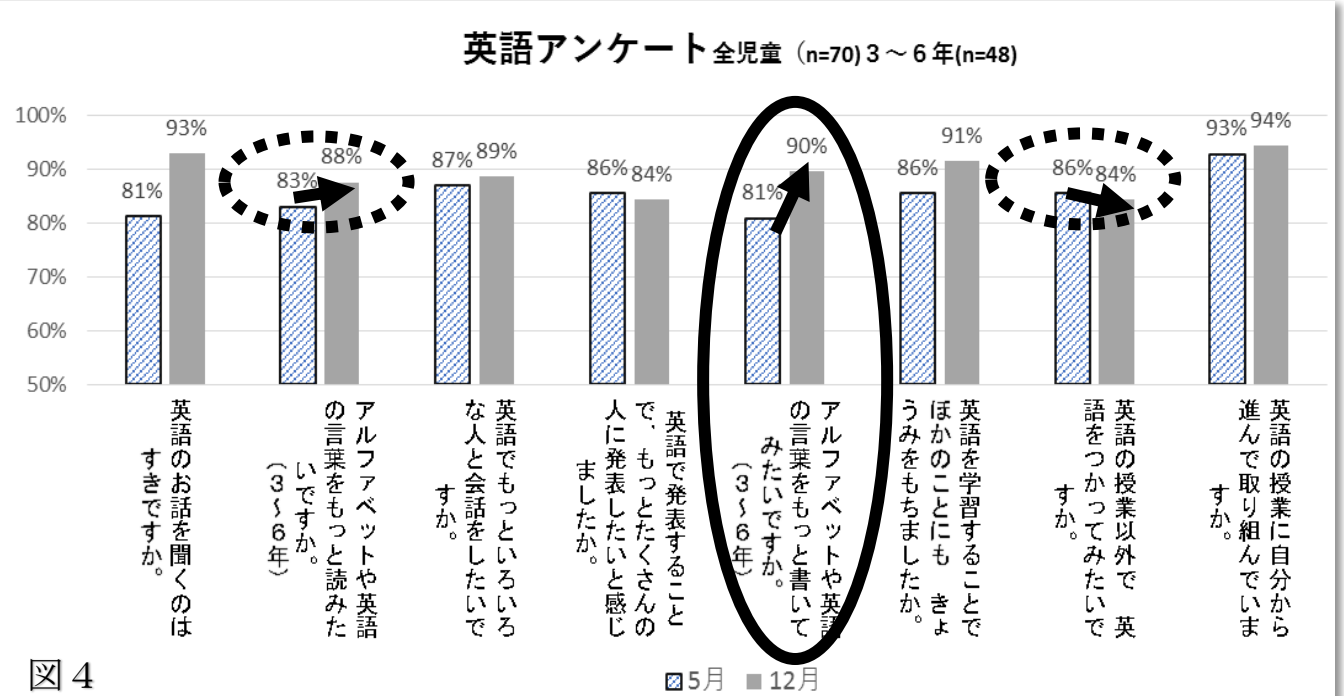


図４

表３　児童の振り返りから

ようちえんさんがようこんでおみせやさんにきていてうれしかったです。

1年生

またやりたいです。とてもたのしかったです。ようちえんさんがえいごでいえていますなと思いました。

2年生

アルファベットさがしは楽しみながらおぼえたのでうれしかったしよかったです。もっといろいろな人にいろいろなアルファベットさがしをだしたいです。

3年生

ときどきすごくむずかしいのもあったけどむずかしい方がもりあがりました。家でもクイズがやりたいです。

3年生

「ビジンさんに総社のお気に入りの場所をしょうかいしよう」というめあてでやってビジンさんのことをたくさん知ったり、宝福寺のことをはっぴょうできたりいっしょにあそんだりできてとてもいい月になったと思います。

4年生

こうもりっかいらんに決まって上手にできるようにがんばりたいです。こうもりがいることを前に教えたいです。

4年生

スペインのこどもたちにちゃんと伝えれるか心配です。言葉をおぼえたいです。

6年生

２　今後の課題

○　「読むこと」に関する言語活動

図４に見られるように，本校の児童は，他の領域に比べて「読むこと」に関する意欲が低い。児童は，絵カードに書かれた単語を読もうとしたり，ＡＬＴの発音に合わせて教科書の文字を指でなぞったりする活動には慣れ親しんでいる。しかし，日常生活の中で慣れ親しんだ語句や表現を見付けようとするなど主体的に文字に関わる姿は見られない。今後，これまで多くの英語表現を聞いたり話したりしてきた児童が，身近な絵本やパンフレットの中から，必要とする情報を識別して読んでいく姿をめざして，「読むこと」に関する言語活動を工夫していきたい。

○　新たな単元開発

図４から，「話すこと[発表]」の領域では児童の意識に大きな向上が見られなかった。昨年度に比べて発表の場が少なくなったり規模が縮小されたりしたことが関係しているのかもしれない。また，英語の授業以外で英語を使ってみたい児童が伸びていないのも，同じ理由が考えられる。単元ゴールの言語活動が発表である場合，場所や発表の対象をできるだけ工夫して，英語で発表する楽しさや達成感を味わえるように単元構成を改善していきたい。また，新教育課程におけるカリキュラムマネジメントによって，新本オリジナルの単元構成を新たに開発していくことにも挑戦していきたい。

○　指導と評価を一体化

評価項目を精選し，適切な評価場面で適切に評価する方法について研究を進める必要があると考える。そして，１単位時間を指導者の計画通り進めるだけではなく，児童が評価規準に達していないと判断した場合に，どんな指導を行うべきなのか，単元をどのように修正するべきなのか，より指導者にとって指導改善に生きる，児童らにとって学習改善に生きる学習評価を進めていきたい。

○　ＩＣＴの活用

児童一人一台のパソコンを外国語活動・外国語科でも活用することによって，より充実した学習が展開されるのではないかと考える。効果的な活用方法を追求したい。